

分科会報告

<第1分科会>

「基礎・基本と評価を重視した学習」

提案者 宇部市立船木小学校 教諭 間恵 和美

1 発表要旨

「学ぶ楽しさを実感しながら基礎的・基本的な知識や技能を身に付ける家庭科学習をめざして」～第5学年「さいほう用具を使おう」の実践～子どもたちの「作りたい」という願いを大切にしながら、基礎的・基本的な知識や技能を定着させるために、題材構成の工夫、互いに学び合う場の設定を視点を研究実践を深め、得られた知識や技能を日常生活で活用できることをめざした。

(1) 研究の概要

① 製作に関する基礎・基本について

生活に役立つ物を布を用いて製作することを通して、縫うなどの基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、生活で活用することができるようにすることをねらいとしている。

② 製作における基礎・基本を確実に身に付けていくために

ア 基礎・基本を明確にする。

イ 基礎・基本を繰り返し指導する。

ウ 個に応じた指導を充実する。

以上の3つの視点から、題材構成の工夫、個に応じた支援と評価の工夫が大切である。

(2) 研究の実際

① 作る楽しさを味わう題材構成の工夫

製作においては、2年間にわたり、発展的に学習を進めていけるように、内容の系統性に配慮して題材を選び、基礎的な物から応用的な物へと題材を配列し、繰り返し学習できるようにした。

② 一人一人を伸ばす個に応じた支援と評価の工夫

ア スクールボランティアによる支援

毎時間3～5人の保護者に参加してもらい、温かい励ましや賞賛の言葉かけをいただくことで、子どもたちは自信をもち、次の学習への意欲付けにつながった。

イ 個に応じた支援と評価の工夫

個人差に応じたきめ細かい支援をするために、それぞれの学習過程に応じた評価規準を作成し、つまずきに対する具体的な支援を用意した。また、個々の児童の学習状

況を的確に判断するために、振り返りカードを作成し、毎時間記入させた。自由記述欄は、つまずきの把握に役立った。この自己評価と観察により、チェックリストを作成し、次時の支援に活用した。

ウ 学び合いの重視

前時の振り返りカードから、悩みや問題点を紹介し、全体で話し合った。そこで出された解決方法やコツは、悩み相談コーナーとして掲示することで、次の活動への意欲を高めることにつながった。

(3) 研究の成果

- ・題材構成の工夫により意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・評価計画に基づいた評価により、個に応じた支援をすることができた。
- ・学び合いの場の設定により違いのよさを認め合い、共に学ぶ楽しさを実感しながら、基礎的な技能を身に付けていくことができた。
- ・スクールボランティアの支援は子どもたちの学習への意欲付けにつながった。

2 研究協議

○ 特別支援学級を担当している。手先が不器用なため、製作を喜ぶというのは難しい。なみ縫いでできるきんちゃく袋などの製作は、簡単で楽しそうだった。

○ きんちゃく袋の製作を行った。糸や針の扱いに慣れている子と、初めてする子の技能の差があるが、速い子にはどんどん工夫させることで、進度を気にせず進められた。振り返りカードを毎時間書くということをやってみたい。

○ 簡単なことから難しいことへといった、題材構成の工夫がされている。振り返りカードは、簡単であるが、基礎・基本がはっきり分かるように作ってある。教師にも負担が少ない。悩み相談コーナーは、子ども同士のものが生かされていた。

○ 本校では、スクールボランティアを5年生の家庭科に活用している。30人くらいの登録があり、6～7人のテーブルに1人ずつ入ってもらって、効果を上げている。

司会 スクールボランティアを活用している学校はどれくらいあるか?(5, 6人挙手)

○ 子どもたちは、針や包丁に慣れておらず、T2でも足りない。そのため、地域の方をお願い

し、計画調整して入ってもらっている。引退世代の20名の登録がある。教師ではない人から教わることのよさもある。

司会 生活経験の乏しい子どもたちに、力を付けさせていくために、どうしているか、また評価の実際についての情報交換をしたい。

○ 学年に4クラスあるので、クラスで差が出ないようにスクールボランティアは活用していない。そのため、各活動を一齐にスタートすることを心がけている。例えば、上糸が通ったら合図をし、全員できたら次へというようにしている。

○ 5年生は家庭科が初めてなので、丁寧にしていこうと心掛けたが、時間がかかり、1人ではあるものの、1人で見るのは大変だった。そのため、参観日に保護者と一緒に行った。きんちやく袋の製作は、基礎・基本の力を付けるのに適している。

自分のクラスでは、練習布の次に小物作りを行った。時間数が少なくなったので、いろいろな活動をしたと思いながら、できないのが実情だ。

○ 教科書にあるように、さらし布でナプキン作りを行った。周囲のなみ縫いだけは全員行い、模様を工夫させた。振り返りカードは、「使ってこそ」が大切なので、そのナプキンを家庭でしばらく使ったり洗濯したりして評価をさせている。ほつれや使い易さ等が評価できる。

○ ミシン縫いについて、メーカーの方に指導してもらって研修を行った。教師自身が基礎・基本を正しく身に付けたいといけない。

また、ミシン縫いを、参観日に設定し、保護者にも協力してもらって指導した。

○ 中学校の特別支援学級を担当している。小学校での実践がよく分かった。以前はパジャマを縫っていたが、今は、1年生には製作の領域はなく、2年生でシステム手帳の作成を行っている。ボタンやスナップ付けをするとき、初めは玉留めや玉結びの確認からする。かなりの生徒が難しく、1時間かかる。針と糸を使うのは好きだが、できないという生徒が多い。きんちやく袋の製作は、個人差に対応できてよい。

3 指導助言

宇部市立新川小学校 校長 由井桂子

(1) 作る楽しさを味わう題材構成の工夫

きんちやく袋の製作は、宇部市教育研究会で手縫いの基礎・基本の実習として行った。教師自身が学ぶことが大切である。

5年生の初めは、期待もあるが、痛いのは嫌とか難しいとかで、意欲が減退する。生活に役に立つ技能を身に付けさせることが大切で、楽しさとともに、生きて働く基礎・基本や技能を定着させなければならない。

製作にかかわる内容では、小さい物から大きい物へ、平面から立体へ、簡単な物から難しい物、複合的な物へと、2年間を見て単元構成がされている。新学習指導要領にも、「実態に合わせて計画を立てることが大切である」とある。

また、エプロンの製作では、ポケットを工夫させるなど、それぞれの技能や興味にそって、ポイントを押さえて指導されていた。

中学校とのかかわりの話題があったが、玉結びや玉留めを2年間を見通して丁寧に指導された子どもたちが、どうなっていくのだろうか。小中が連携して知ることは大切だ。

(2) 指導と評価の一体化

振り返りカードやチェックリストで、きめ細かく評価がなされていた。膨大になると難しいので、いかに簡潔にするかが必要である。この時間に身に付けさせたい力、視点を明確にすることが大切である。そして、指導と評価を一体化させるために、どこまでできて、どこからできていないのかを見取る。支援の取りこぼしがあると、後からが大変になる。与えられた時間の中で評価することが大切で、繰り返すことは大変ではあるが、繰り返すことで、どこを見ていけばよいのかが、はっきりしてくる。具体的に評価の規準を設けることも大切である。「玉結びができる」とは、何ができて「できる」とするのか。布についていないといけないのか、形ができていけばよいのか、仕方が分かっているのか、はっきりしておく。

使った後の評価も大切で、プレゼントした後の評価なども考えられる。

(3) スクールボランティアの活用

5年生の初めは、きめ細かな支援が必要である。地域のボランティアや、保護者、T1・T2・T3の工夫、また、管理職を活用することも考えられる。子どもたちにとってよいことが一番である。